

40 日本における医学映画の淵源

寺 畑 喜 朔

江戸期には「写し絵」(光源は蠟燭)により人々はその画像を楽しんだ。次に登場するのは「幻燈」である。明治六年文部省の寺島精一が米国から帰国の際、幻燈機と種板約七十枚持ち帰ったが直ちに実用化されず、同十三

年に文部省は理科学の新知識のある鶴淵初蔵と中島待乳の二人に幻燈機の製作を依頼し、研究を重ねて製作に成功し文部省に納品した。文部省は地方の師範学校にマジックランタンを「幻燈」と訳名をつけ配布した(石井研堂著、明治事物起源)。医事新聞、二十一号(明治十三年一月)に「本月六日石黒忠憲君は東京大學醫學部を借用して朝野の醫士を會し醫學部教授三宅秀、田口和美の二君を請招し幻燈シネプチコンを用ひて組織學的映畫並に辯解を演し終て立食會を催されたり」とある。わが国の幻燈による医学教育の嚆矢と判断してよい。翌十四年十

月文部省は「幻燈用解體圖略説」を公刊した。専用種板二十枚は未発見である。明治十六年に文部省は経費が欠乏し幻燈教育を廃止した。しかし、鶴淵は民間へ広めようと日本教育幻燈会を組織し、その効用の啓蒙に努めた。同十九年福島県白川郡役所より一組の注文を受け、以来次第にその成果が見え始めた。積極的に活用したのは衛生思想を広めようとした大日本私立衛生会で機関誌の事業記事はその実情を伝えている。

十九世紀末 Edison は「動かない幻燈を動く映画にする」発想でキネマトスコープを發明し(同時代仏国ルミエール兄弟がシネマトグラフ發明)、明治二十九年十一月初めて神戸に業者高橋信治により二台輸入され、上映され(神戸又新日報)、これを「活動写真」と名付けた。以来、京都、大阪、東京、横浜で活動写真は急速に普及し興業化が進んだ。

医学分野で明治期の活動写真に関する資料を検索するが、未だ確たる知見を得ないが、明治四十四年三月の小金井良精教授在職二十五年記念会で活動写真(娯楽物?)が上映されている(医海時報)。医事雑誌「大日本

私立衛生会雑誌」を通覧すると、大正六く七年には、日本結核予防協会監修の「結核予防フィルム」の発売広告と内容紹介があり、同誌に各種幻灯機の同時発売の広告があるから、この時代は幻灯、映画の折衷期で、医学分野では衛生思想の普及、啓蒙が先行したとみてよさそうである。大正九年七月に「活動写真の医学的応用」の見出しで大阪マルホ商会が米国クリニカルフィルム社製の手術映画四種と携帯映画器を輸入し、活用を薦めている(医海時報)。幸い大正十五年五月に開学記念会を開催した金沢医科大学では基礎、臨床の各教室が製作した活動写真を一般公開上映した。そのフィルムが約二〇巻保存されている(一部再生ビデオ化する)。

本格的にわが国で積極的に医学映画に取り組むのはトキーが普及する昭和初期である。日本医学会で最初に医学映画を公開したのは昭和五年の第八回総会(大阪医科大学、会頭佐多愛彦)で東京医学写真協会が主催した。プログラムは十九本で伝染病研究所(五本)、京大の藤波鑑、大沢達、慶大の川上漸、北川正惇、新大の澤田敬義、愛知大の斎藤真(四本)、九大の三宅速らが医学映

画を出品上映した。以来、第十、十一回医学会総会において医学映画会が開催され、全国的普及はこの時代からである。名大斎藤真教授が発起し、昭和十四年に医学映画研究会が組織され、会員に全国医育機関の教授達が多数名を連ねている。この研究会が作成した会員らの所蔵映画の目録をみると、誠に盛大といわざるをえない。実態は未詳であるが、目録を通じて会員相互に交換上映したようである。

残念ながら、これらの膨大なフィルムは可燃性のため第二次世界大戦で人為的に調査の結果、焼却の運命を辿ったと聞く。惜しきかな、惜しきかな。

(金沢医科大学)